第8章 集団間差別行動と集団性の意識の関連

第8章では,カテゴリー化基準として偶然性(研究4)および社会的態度(研究5)を用い,最小条件集団実験において集団間差別と集団性の意識化の関連を検討する. そして,最小条件集団実験における集団間差別の説明として,社会的アイデンティティ理論の妥当性を検証する.

8.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化における集団間差別と集団性の意識の関連【研究4】[4]

研究2では,くじ引きという偶然性に基づいて被験者を少数派と多数派に分割したとき,少数派が後の得点分配で内集団びいきを示したのに対し,多数派が示さなかったことを明らかにした. この結果は,知覚論における図と地の関係から,より小さい少数派のほうが多数派よりも自身の集団性を意識化しやすいために生じたと解釈された. しかし,集団性の意識の程度について,研究2では直接測定されていない. したがって,集団性の意識化の程度を測定することで,上記の点を確認することが必要と考えられる. また,研究2の結果は,内集団成員と外集団成員の組合せで得点分配を数多く繰り返すことによって,被験者に実験者の意図性が伝わってしまう可能性があるのではないかという疑問が提出された. このため,内集団びいきの測定のための試行数を最小限にし,内集団成員同士あるいは外集団成員同士の得点分配をダミー試行として取り入れる,などの測定上の改善が望まれる. さらに,日本において最小条件集団パラ

[4] 久保田健市・吉田富二雄 1995 少数派および多数派集団の集団間差別と態度の類似性 社会心理学研究, 11, 116-124.(実験1)

ダイムを用いた実験研究は極めて少なく,繰り返し実験を行い,結果の頑健性を確認することは意義のあることと思われる.

目　的

研究4では,くじ引きという偶然性で少数派と多数派に分割されたときの両者の集団間行動が集団性の意識とどのような関連性を持つかについて,以下の仮説を検討することを目的とする. あわせて,実験の手続きおよび集団間差別の測定の仕方を改善し,研究2の結果の頑健性を確認する. すなわち,偶然性でカテゴリー化がなされるとき,

仮説1　多数派に比べて少数派のほうが,自らの集団をより強く意識するであろう.

それゆえに,

仮説2　少数派は,内集団をひいきし外集団を差別するであろう.

仮説3　多数派は,あまり強い内集団びいきを示さないだろう.

仮説4　少数派では,集団性の意識と集団間差別の程度の間に,正の相関が見られるだろう.

方　法

被験者　筑波大学学生71人(男子24人,女子47人).

手続き　実験は,意思決定に関する心理学的実験として,授業時間を用いて全被験者を対象に行われた. 実験の流れをFigure 8.1に示す. 研究2と同様に,実験の都合上いくつかの集団に分割するためとして,被験者はくじを引いた. 続いて,くじ引きの結果から,全体がおよそ80%の多数派とおよそ20%の少数

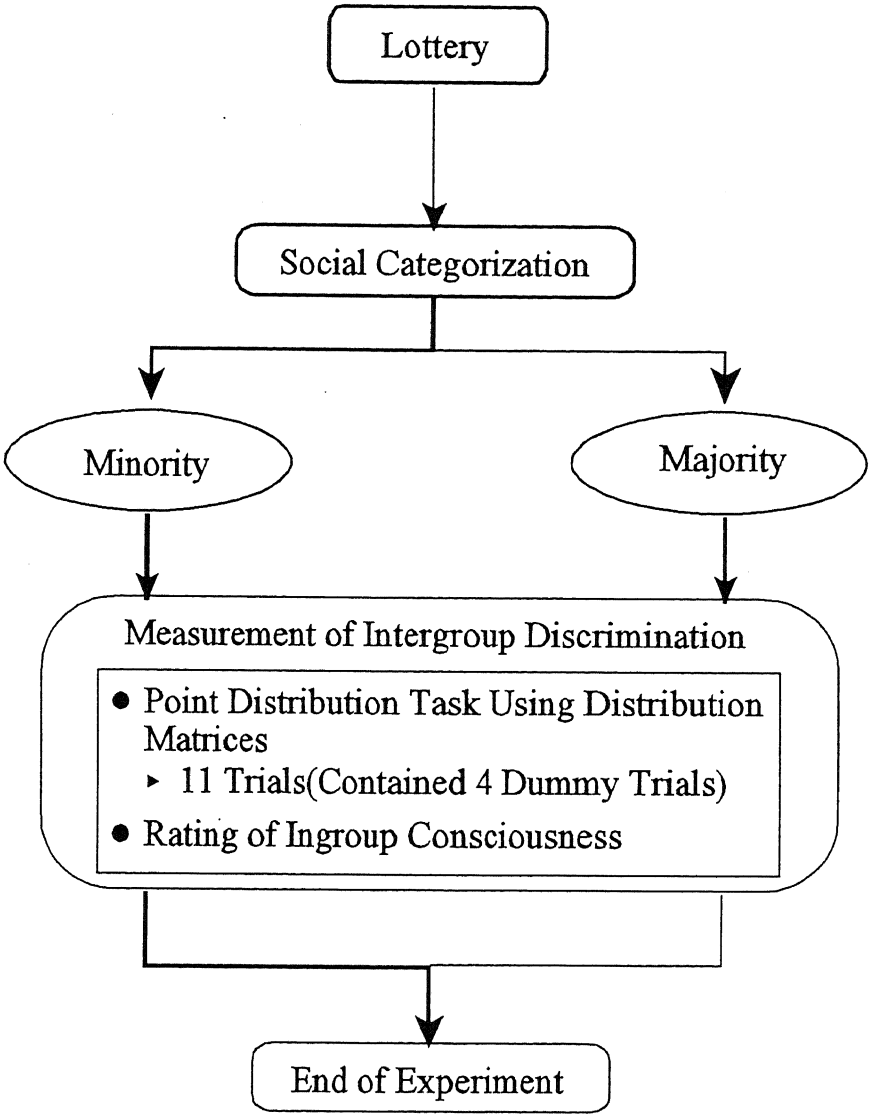

Figure 8.1 Flowchart in Study 4

派に分割されたこと(実際には,被験者は2つの集団にほぼ等数に分けられた),被験者一人一人に集団所属に基づいたコード番号が割り当てられたことが告げられた. その後,分配マトリックスが書かれた小冊子が配られ,被験者は

匿名の2者に対する得点分配課題を行った. 最後に,集団を意識する程度を評定して,実験は終了した.

分配マトリックス 得点分配課題には,研究2で用いられた分配マトリックスのうち,(a)内集団びいき,(b)内集団びいきvs.公平性,(c)内集団びいきvs.最大共同利益,(d) 最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益,の4種類をそれぞれ1タイプずつ用いた(Table 7.1における(A)のマトリックス).

得点分配は,内集団成員と外集団成員に得点を与える7試行と内集団同士あるいは外集団同士に得点を与える4試行(実験の意図を被験者に推定させづらくするためのダミー試行)の計11試行が行われた. マトリックスの提示には,順序効果を打ち消すよう配慮した. 内集団びいきの指標には4種類のプル得点と内集団びいき得点の合計5つを用いた.

集団性の意識 被験者は,集団を意識した程度に関し,次のような質問を受けた.「くじによって自分が所属した集団をどの程度意識しましたか」 意識の程度は,「意識した」から「意識しなかった」までの9段階で評定された(0-8点).

結 果

集団性の意識 得点の分配において集団を意識した程度の平均評定値を少数派・多数派ごとにTable 8.1およびFigure 8.2に示す. 集団性の意識の程度を少数派・多数派間で比較するために,t検定を行った. すると,多数派(n=31)に比べ,少数派(n=40)は自らの集団を有意に強く意識していた($t(68)=1.85$, $p<.05$). よって,仮説1は支持された.

得点分配行動 プル得点の平均値を少数派・多数派ごとにTable 8.2およびFigure 8.3に示した.「内集団びいき」については,「母平均値=0」を帰無仮説とするt検定,その他についてはWilcoxonの符号つき順位和検定を少数派・多

Table 8.1

Mean ingroup consciousness scores

	Group Membership			
	Minority [a]		Majority [b]	
	M	*SD*	*M*	*SD*
Ingroup-consciousness	4.58	2.93	3.37	2.37

[a] n=40, [b] n=31

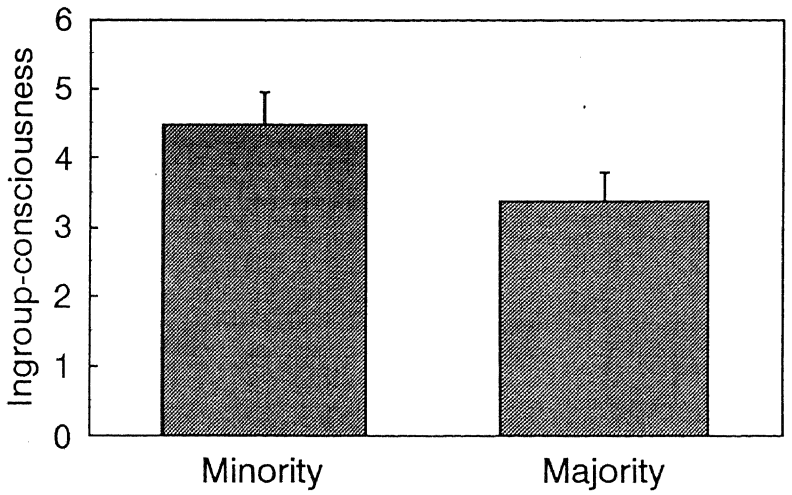

Figure 8.2 Mean ingroup-consciousness scores in Study 4

Table 8.2
Mean pull scores in Study 4

	Group Membership			
	Minority		Majority	
Pull Score	*M*	*SD*	*M*	*SD*
FAV	-0.35	3.43	-0.44	2.92
FAV on F	1.08	4.87	0.23	4.97
FAV on MJP	1.28*	4.64	-1.10	4.50
MD on MIP+MJP	2.28**	5.51	-0.65	

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.
* $p<.05$. ** $p<.01$, One-tailed.

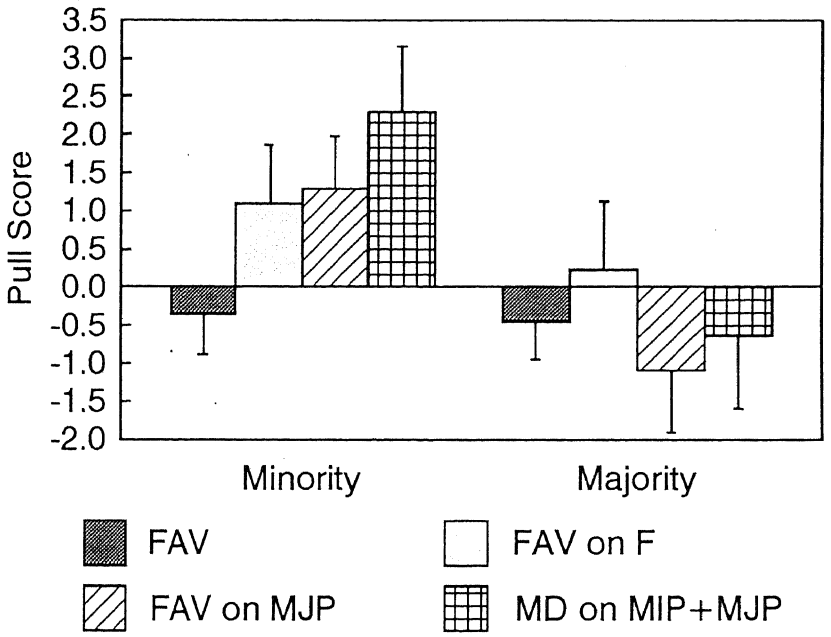

Figure 8.3 Mean pull scores in Study 4

数派ごとに行った. 結果として,少数派では,「内集団びいきvs.最大共同利益」(z=-1.96, p<.05)「最大差異vs.最大内集団利益＋最大共同利益」(z=-2.52, p<.01)の2つで有意な内集団びいきが見られた. しかし多数派からは,いずれのマトリックスにおいても,有意な内集団びいきは見られなかった.

同様に,内集団びいき得点の平均値をTable 8.3およびFigure 8.4に示す. 「母平均値=0」を帰無仮説とするt検定を少数派・多数派ごとに行った. その結果,少数派は有意な内集団びいきを示したのに対し(M=7.55,t(39)=2.04, p<.05),多数派では有意な内集団びいきが見られなかった(M=2.61,t(30)=0.73, *n.s.*).

以上の結果をまとめると,少数派は内集団びいきに関する5つの指標のうち3つで有意な内集団びいきを示した. これに対し,多数派では,いずれの指標からも有意な内集団びいきが見られなかった. よって,仮説2および仮説3は支持されたといえる.

集団性の意識と集団間差別の関連 内集団びいき得点と集団性を意識する程度の評定値に関し,被験者全体および少数派・多数派ごとにPearsonの積率相関係数を求めた(Table 8.4). 全体として,集団を意識する程度は,内集団びいき得点と有意な正の相関があった(r=.33, p<.01). さらに,少数派で有意な正の相関が見られた(r=.39, p<.05)のに対し,多数派では有意な相関は見られなかった. 以上より,少数派は自身の集団性をより意識するにつれ,内集団を強くひいきしたことが明らかにされ,仮説4は支持された.

Table 8.3

Mean ingroup favoritism scores in Study 4

	Group Membership			
	Minority		Majority	
	M	*SD*	*M*	*SD*
IFS	7.55*	23.46	2.61	19.85

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

* $p<.05$, One-tailed.

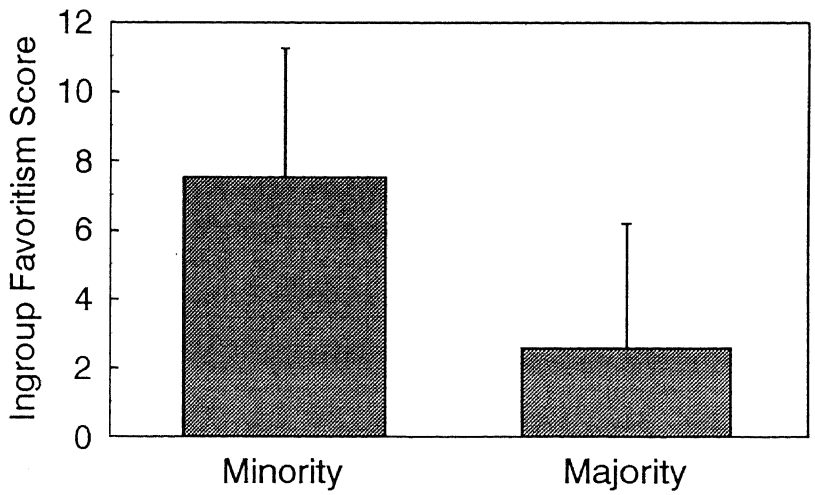

Figure 8.4 Mean ingroup favoritism scores in Study 4

Table 8.4
Correlations between ingroup favoritism scores and ratings of ingroup-consciousness, for the minority and majority

	Group Membership		General
	Minority	Majority	
r	.39*	.30	.33**

* $p<.05$. ** $p<.01$, One-taied

考　察

研究4の結果は,当初設定された仮説1,仮説2,仮説3,仮説4のすべてを支持するものといえる. すなわち,「内集団びいきvs.最大共同利益」「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」「内集団びいき得点」の3つで,少数派は有意な内集団びいきを示した. これに対し,多数派ではいずれの指標においても内集団びいきを示さなかった. 同様の手続きにて行われた研究2では,「内集団びいき」「内集団びいきvs.最大共同利益」「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」「内集団びいき得点」の指標で,少数派のみが有意な内集団びいきを示した. 研究4の結果は,「内集団びいき」を除いた3つの指標で研究2と一致した. このように,くじ引きのような偶然性に基づく社会的カテゴリー化がなされたとき,少数派は内集団びいきを示し,多数派は示さないという知見が繰り返し確かめられた. さらに研究4では,内集団びいきを測定する試行の数を最小限にし,内集団同士および外集団同士の得点分配をダミー試行として組み込み,実験者効果の可能性を排除するよう努めた. にもかかわらず,少数派が内集団びいきを示し,多数派は示さないという知見が繰り返された.

加えて,多数派よりも少数派のほうが,集団性をより強く意識することも確かめ

られた. それだけでなく,内集団びいき得点と集団を意識する程度の間に有意な相関が認められた. これらの結果は,自身の集団性を意識する程度に従って強い内集団びいきが見られるとする社会的アイデンティティ理論を傍証するものといえる. ただし,この有意な相関は少数派でのみ認められ,多数派では消失した. 少数派に割り当てられることによって,自身の集団性がある程度明確に意識化されるようになる. そのときになって,はじめて内集団びいき(外集団差別)の強さを規定する個人内変数として,集団を意識する程度が意味を持ってくると考えられる. 逆に,多数派では,集団性を意識する条件が一定の水準に達していない(弱い)ため,個人が集団性を意識する程度と内集団びいきの強さの関係はよりあいまいなのではないかと推測される.

8.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化における集団間差別と集団性の意識の関連【研究5】

続いて,社会的態度(価値性に基づく社会的カテゴリー)に基づく少数派および多数派の集団間差別行動と集団性の意識の関連について検討する. この問題に関し,後述する研究6の結果の一部を研究5として報告する. 研究3で示されたように,社会的カテゴリーが何らかの価値性に基づくものであると,価値の対立によって集団間の差異が明確になると考えられる. そのため,少数派だけでなく多数派も,自身の集団性を意識するようになり,集団間差別を示すようになる. さらに,内集団びいきの強さと集団性を意識する程度の間に正の相関が見られると予測される.

目　的

以上より,研究5では,以下の仮説を検討する. すなわち,社会的態度によって社会的カテゴリー化されるとき,

仮説1　少数派も多数派も,ともに外集団に比べ内集団をより強く意識するだろう.

仮説2　少数派は,内集団をひいきし外集団を差別するだろう.

仮説3　多数派もまた,同様に内集団びいき—外集団差別を示すだろう.

仮説4　少数派は,集団性を強く意識するほど強い内集団びいきを示し,これらの間に正の相関が見られるだろう.

仮説5　多数派でも,集団性の意識と内集団びいきの間に正の相関が見られるだろう.

方　法

被験者　筑波大学学生79人（男子30人，女子49人）．被験者は研究6と同じである．

手続き　最初に,被験者は6項目の社会的態度調査に対し,賛成―反対の8段階で評定した．その後,調査の結果について少数派と多数派の2つの態度傾向が見られたと告げられた．そして,実験者は,被験者自身の集団成員性とコード番号を個別に教示した．その後,被験者は,集団成員性とコード番号のみが知らされた2人の他者に得点を分配する課題を行った．最後に,集団性の意識化について評定し,実験は終了した(研究6参照).

集団性の意識　被験者は,(a)内集団の所属感,(b)外集団を意識した程度,の2項目について,「ほとんど意識しない」から「非常に強く意識する」までの9段階で評定した(0-8点).

結　果

社会的態度調査による集団所属の操作を十分に信じていないと思われた15人のデータは,分析から削除された.

集団性の意識　少数派と多数派に関し,内集団への所属感および外集団を意識した程度の平均評定値をTable 8.5およびFigure 8.5に示す．集団性の意識の評定値を指標とし,所属集団(少数派/多数派)とターゲット集団(内集団/外集団)を要因とする2要因分散分析を行った．すると,ターゲット集団の主効果のみが有意であり($F(1,42)=15.93$, $p<.001$),所属集団の主効果および交

Table 8.5
Mean ingroup- and outgroup- consciousness scores,
for the majority and minority in Study 5

	Group Membership			
	Minority [a]		Majority [b]	
Target	*M*	*SD*	*M*	*SD*
Ingroup	4.86	1.81	4.64	2.67
Outgroup	3.36	1.97	4.05	2.44

[a] n=22, [b] n=23

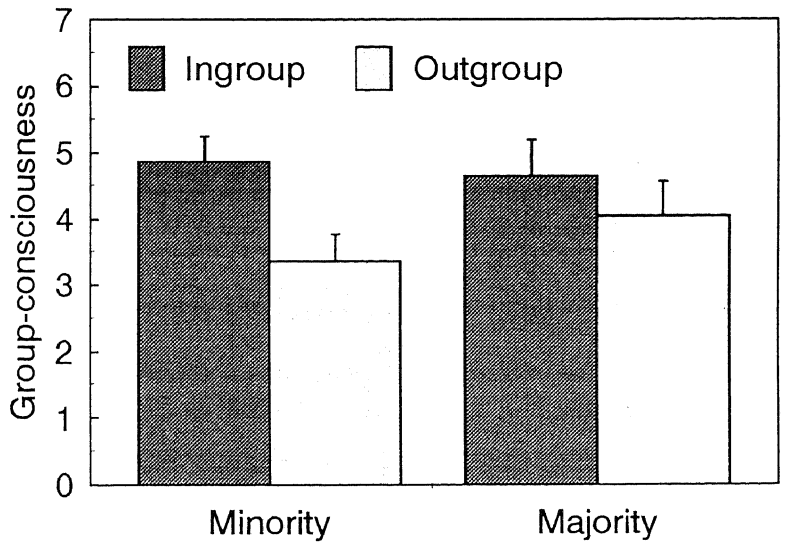

Figure 8.5 Mean ingroup- and outgroup- consciousness scores, for the majority and minority in Study 5

互作用は有意ではなかった. すなわち,少数派(n=22)も多数派(n=23)も,ともに外集団ではなく内集団への所属感をより強く意識した. したがって,仮説1は支持された.

得点分配行動　4種類のプル得点の平均値を少数派・多数派ごとにTable 8.6およびFigure 8.7に示した.「内集団びいき」については「母平均値=0」を帰無仮説とするt検定,その他のマトリックスについてはWilcoxonの符号つき順位和検定を行った. その結果,少数派は「内集団びいきvs.公平性」(z=1.75, p<.05)および「内集団びいきvs.最大共同利益」(z=2.37, p<.01)の2つで,有意な内集団びいきを示した. 一方,多数派は,「内集団びいき」(t(22)=2.51, p<.05)「内集団びいきvs.公平性」(z=2.94, p<.01)「内集団びいきvs.最大共同利益」(z=2.73, p<.01)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」(z=2.41, p<.01)のすべてで,有意な内集団ひいきを示した.

同様に,内集団びいき得点の平均値をTable 8.7およびFigure 8.7に示す.

Table 8.6
Mean pull scores in Study 5

	Group Membership			
	Minority		Majority	
Pull Score	*M*	*SD*	*M*	*SD*
FAV	0.59	2.20	1.67*	3.20
FAV on F	0.77*	2.14	3.61**	4.56
FAV on MJP	1.45**	3.19	3.52**	4.88
MD on MIP+MJP	0.73	3.37	4.13**	6.67

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.
* p<.05. ** p<.01, One-tailed.

「母平均値=0」を帰無仮説とするt検定(片側検定)を少数派・多数派ごとに行った. その結果,少数派(M=7.82, t(21)=2.60, p<.01)も多数派(M=25.26, t(22)=3.80, p<.001)も有意な内集団びいきを示した. 以上より,少数派も多数派も,ともに明確な内集団びいきを示したと考えられ,仮説2および仮説3は支持されたといえる.

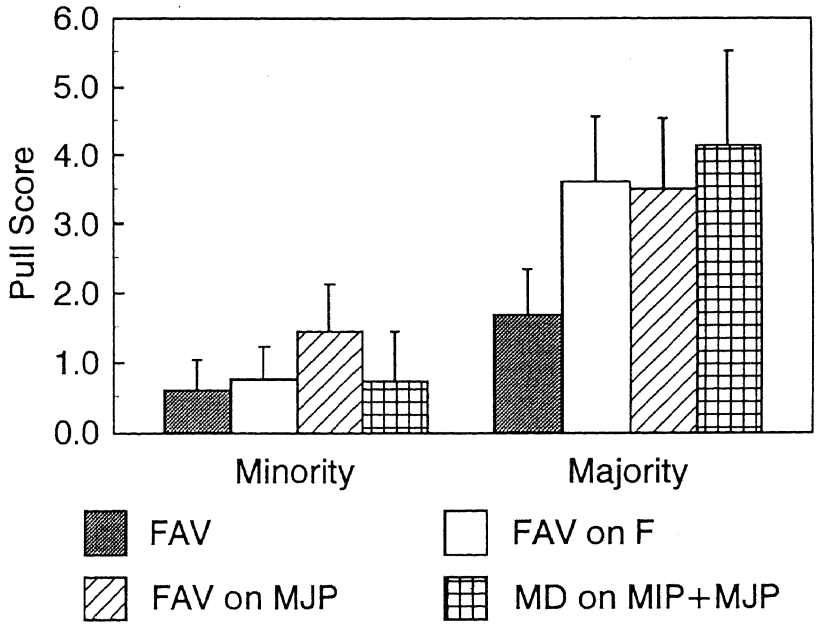

Figure 8.6 Mean pull scores in Study 5

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

Table 8.7
Mean ingroup favoritism scores in Study 5

	Group Membership			
	Minority		Majority	
	M	*SD*	*M*	*SD*
IFS	7.82**	14.10	25.26***	31.88

Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.
** $p<.01$. *** $p<.001$, One-tailed.

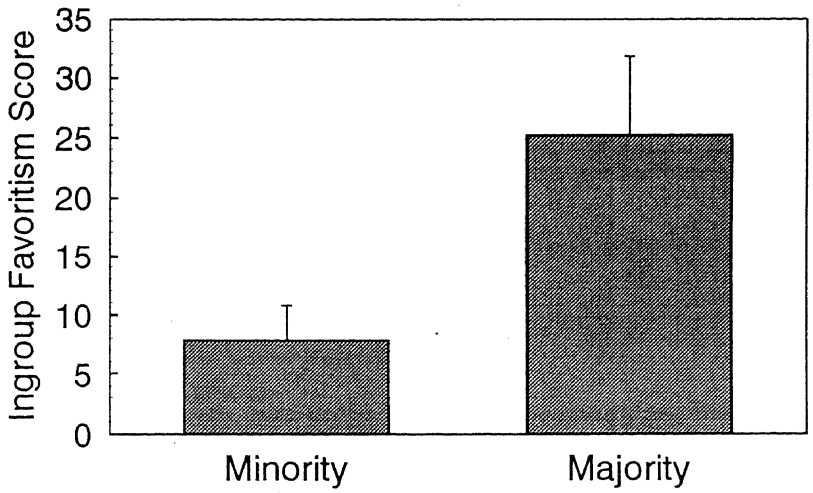

Figure 8.7 Mean ingroup favoritism scores in Study 5
Note. The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

集団性の意識と集団間差別の関連 内集団への所属感あるいは外集団を意識した程度と内集団びいき得点の間でPearsonの積率相関係数を少数派・多数派ごとに求めた(Table 8.8). すると,多数派でのみ,内集団への所属感と外集団に対する意識の両方で,内集団びいきとの間に有意な正の相関が見られた(内集団: r=.52,外集団: r=.45,ともに p<.05 片側). すなわち,多数派は,内集団への所属感,あるいは,少数派の存在を意識するにつれ,強い内集団びいきを示すようになった. これに対し少数派は,集団全体として有意な内集団びいきを示したもののその程度は弱く,個々の成員が意識した集団性の程度と内集団びいきの強さの関係は,よりあいまいであった(内集団: r=.30,外集団: r=.17,ともに *n.s.*). したがって,仮説5は支持されたが,仮説4は支持されなかった.

Table 8.8
Correlations between ingroup favoritism scores and ratings of ingroup- and outgroup-consciousness, for the minority and majority

	1	2	3
Minority(n=19)			
1. Ingroup Favoritism Score	--	.30	.17
2. Ingroup-Consciousness		--	.44*
3. Outgroup-Consciousness			--
Majority(n=21)			
1. Ingroup Favoritism Score	--	.52*	.45*
2. Ingroup-Consciousness		--	.79**
3. Outgroup-Consciousness			--

* p<.05. ** p<.01, One-tailed.

考　察

研究5の結果は,当初設定された仮説を部分的に支持するものだった. すなわち,集団性の意識について,少数派も多数派もともに外集団よりも内集団への所属感を強く意識しており,集団間に有意な差は見られなかった(仮説1). また,得点分配行動において,少数派では,「内集団びいきvs.公平性」および「内集団びいきvs.最大共同利益」および「内集団びいき得点」の3つで有意な内集団びいきが見られた(仮説2). また,多数派は集団間差別に関するすべてのプル得点および内集団びいき得点で,内集団をひいきし外集団を差別する分配を示した(仮説3). しかし,集団性を意識する程度と内集団びいきの間に有意な正の相関が見られたのは,多数派のみであり,仮説5は支持されたが,仮説4は支持されなかった.

研究4で明らかにされたように,くじ引きのような偶然性でカテゴリー化されるとき,少数派と多数派の集団性の意識の程度に差が見られる. しかし,社会的態度によって被験者を集団にカテゴリー化した本研究では,少数派と多数派の集団性の意識の程度に差は見られなかった. これは,社会的態度によってより強調された集団間の差異性を媒介として,少数派だけでなく多数派もまた自身の集団性を意識するようになるという本研究の予測と一致する.

さらに,自身の集団性を意識することによって,少数派だけでなく多数派もまた,内集団びいき外集団差別を示すようになったと考えられる. 本研究では,集団間差別に関する5つの指標のうち,少数派では3つの指標で,多数派ではすべての指標で有意な内集団びいきが見られた. 同様の手続きにて行われた研究3では,少数派は「内集団びいき」「内集団びいきvs.公平性」「内集団びいきvs.最大共同利益」「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」「内集団びいき得点」のすべてで有意な内集団びいきを示した(「内集団びいきvs.公平

性」では,筑波大学のデータでのみ内集団びいきが見られた). そして,多数派では,「内集団びいきvs.公平性」(筑波大のみ)「内集団びいきvs.最大共同利益」(大正大のみ)「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」(筑波・大正)「内集団びいき得点」(筑波大のみ)の指標で,有意な内集団びいきが見られた. 本研究の結果は,研究3と同様に,カテゴリー化基準が社会的態度のような価値性を含むとき,少数派も多数派もともに明確な内集団びいきを示すという知見を確かめたものといえる.

ただし,研究5では,集団性の意識の程度と内集団びいきの間に関連が見られたのは多数派のみであった. なぜ少数派で,集団性の意識の程度と内集団びいきの間の関連が見られなかったのか. これら当初の仮説とは異なる結果については,研究6で詳しく論じることとする.

8.3 まとめ

この章では,集団性の意識について直接測定し,社会的アイデンティティ理論で仮定される集団間差別行動との関連性について検討した. 偶然性によって少数派と多数派にカテゴリー化される場合(研究4),少数派は多数派よりも有意に強く自身の集団性を意識していた. その結果,少数派は,有意な内集団びいきを示し,内集団びいきと集団性を意識する程度の間に有意な正の相関が見られた. 一方,多数派では内集団びいきも内集団びいきと集団性を意識する程度の関連もあいまいであった. これらは,研究2の結果を確かめるものであった.

続いて,社会的態度で少数派と多数派にカテゴリー化された場合(研究5),研究3と同様に少数派も多数派もともに内集団を有意にひいきした. しかし,仮説に反して,内集団びいきと集団性の意識化の間に有意な正の相関が見られたのは,多数派のみであった.